
天使が降りる夜

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使が降りる夜

【Nコード】

N4871S

【作者名】

新辺カコ

【あらすじ】

クリスマス夜の夜、仕事が終わって帰ると、目の前に自分は妖精だと言っている女の子がいて…。

「疲れたあ……」

仕事を終えたあたしはフラフラと家路を辿る。

街にはけけばけかしいネオンと賑やかにバカ明るい歌が流れている。

そう、今日はクリスマス。多くの人が、この日は一年の中で一番ワクワクする日だろう。

だけど、あたしは違う。

あたしは独り暮らしだ。一緒に過ごす家族も、恋人もない。職場の友達は今日に限ってみんな用事があるみたい。

ふん、クリスマスに用事って…デートしか、ないじゃん…。わかりきってんだから。うそつくんなら、もっと上手くつきなさいよ。

心の中で毒づきながら、スタスタ歩く。

洋菓子店の前を通る。いつもは何てこと無いけど、この店のケーキを、買うこともあるけど…。

この日だけは素通りしたくなる。

アルバイトの女の子があたしを見つけて。売り声をかける。

「クリスマスケーキ、いかがですかあ？」

悪気は無いってわかってる。顔見知りだから声かけたってことも。

「クリスマスケーキ、いかがですか？」

も一度、呼び声がかかる。

自分でもどうしてかわからない。

けど、気がついたら、店の中に入っていた。

「…美味しそうね。…買っちゃお、つかない…」

そういえば子供の頃、（大人になったらホールのケーキを買って、ひとりでたべちゃおう）

って思った事があったっけ。

子供だったころの、他愛ない夢。

そんなことを考えながらあたしはケーキを選んで、店を出る。

抱えた箱に入っているのは、丸い、ホールのケーキ。

「はあ…」

買ってしまったって、あたしはため息をついた。

（我ながら、あたしって…バカ。独り暮らしなのにこんなの買ったら余計むなしいじゃん…）

買っちゃったものはしょうがない。食べた残りは冷蔵庫に入れて…なんて考えを巡らせながら、アパートに到着。

歌の文句じゃないけど、独りで開ける部屋の鍵は、冷たくて重い。

「疲れたあ…」

『おかえりなさい』

「あー…ハイハイ。ただいま…」

エッ………？

つられて返事したけど、今の…誰？

「ちょっと！誰かいるの？」

『あたしよ』

声のする方を見た。そこにいたのは小さな女の子。

どこかで見たことがあるような、ないような顔の女の子だけど、来てるものが変だった。

バレエの衣装みたいなぴったりした短い真っ白なワンピース。ほかには何も羽織っていない。

エアコンもついてないのに、寒くないのかしら。

『あたし、エインセル』

その子は、別に聞いてもいないのに名乗った。

「エ、エンジェル？」

『違うわ。エインセルよ。それでも妖精なんだから』

妖精い？あたしはその『エインセル』と名乗った子をじっと見た。見たところ羽もないし、浮いてもない。

顔だって、純日本人の顔。第一、妖精なんているわけないじゃん！

「あんた、ホントに妖精？日本人顔じゃん」

『化けられるもん』

その子はちよつと得意気に胸をそらせた。

「じゃあ、何かに化けて見せてよ」

『無理』

…即答かよ。オイ。

『でも、この顔は化けた顔だよ。あなたが子供の頃の顔。エインセルは、自分自身って意味なんだって』

子供の頃の顔？そう言われてみればそうかもしれない。だからさっきどこかで見たような気がしたのか。

「すると何？あなたは相手の子供の頃の顔にしか、化けらんないワケ？」

『うん』

ニコニコ笑って、また即答だ。

「他には？」

エインセルは首を傾げる。

「幸せにしてくれるとか、反対に不幸にするとか」

『わかんない。時々人間の子供とあそぶ。それだけ』

それだけ、って…。大体なんでこの半端妖精（？）ここにいるわけ？

頭のなかクエスチョンマークだらけのあたしをよそに、エインセルは言った。

『ねえねえ、今日はクリスマス。何かちょうだい』

…今日はハロウィンじゃないわよね。トリック・オア・トリートですか？

「全く……。クリスマスだつてのに…サンタクロースもろくでもないプレゼントくれたものね」

『サンタクロース…って、なあに？』

「今日、この世で一番忙しい思いしてる人よ。良い子にはプレゼントくれるの。どうやらわたしは悪い子とみなされたみたい」

エインセルは、くりっと首を傾げる。

『どんな格好してるの？』

「どんなって…赤い服着て、赤い帽子で…」
その言葉に、エインセルの顔色が変わった。

『赤い帽子ですって？まあイヤだ！』

「赤い帽子、嫌いなのか？」

『だいつきらい！』

エインセルは首をぶんぶん振った。人間のものでは有り得ない、キユツと尖った耳が見えた。

『それより、クリスマスだよ。なにかちょうだい』

また、それか……。あたしは苦笑を浮かべた。

ホールのケーキ、買っというて良かったかも。っていうか、妖精って食べたり飲んだり出来るっけ……？

「あんた、もの食べたり出来るの？」

『食べるの好き』

良かった。ケーキ消費してもらおう。

ケーキをお皿に切り分け、エインセルを呼んだ。彼女はとてとてと歩いてくる。

まるつきり人間みたい。何度も思ってる気がするけど、コイツ本当に妖精だろうか。

サンタクロースの砂糖人形が乗ったところをエインセルに渡す。私も一切れ切り取って紅茶をいれる。

『ミルクティーがいいな。甘いのがいい』

そう言いながらエインセルは砂糖をどばどばいれた。げえ、胸やけしそう。

明らかに紅茶の味なんかなくなったであろうそれを、彼女は美味しそうに飲んだ。

「ねえ……」

甘いケーキをストレートの紅茶で飲み下しながら、私は聞いた。

「なんで赤い帽子、嫌いの？」

エインセルはさっきからサンタクロースの砂糖人形を食べようともせず、フォークで突っついている。
とうとうボロボロにしてしまう。

よっぽど嫌なのかな。赤い帽子。

『妖精の中には…』

エインセルはぼそりとつぶやいた。さっきまでの元気はどこへやら、口調も沈んでいる。

『人間にイヤなことする奴もいるの。そいつが赤い帽子かぶってるから…帽子を赤く染めるには人間の血が一番いいんだって』

「う…」

ケーキ食べながら聞きたい話じゃないな…。

『…だいたいあんないけ好かない奴みたいのがいるから妖精を怖がったりいじめたりする人間がでてくるのよ!』

エインセルはプルプル震えている。

『あたしは人間とあそびたいのに…仲良くしたいのに…!』

「エインセル…」

あたしは言った。

「ケーキ…もう一切れどう？」

『ねえ、あなたの願いはなあに？』

はぐはぐとケーキを食べながら、エインセルが聞いた。口元にクリームがくっついている。

『カンタンなものなら叶えてあげられる…気がする』

「あんた、化けられるだけって言ってなかったっけ？」

『だって、今日はクリスマスだよ。良いことが起きるって信じたいじゃん』

「だったら…」

あたしはちよつと考えるふりをした。

さっきから、言おうと思ってた言葉を整理する。

「来年のクリスマスも、ここに来てくれる？」

エインセルは目を見開いた。

『また来ても、いいの？』

あたしはにっこり笑う。さっきまでの暗くモヤモヤした気持ちはずっ
つかりなくなっている。この子はホントにエンジェルなのかもしれない。

「もちろん。今度はクリスマスのご馳走作って待ってるから」

どこからか、にぎやかな鈴の音が聞こえる。
この、天使が降りる夜に…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4871s/>

天使が降りる夜

2011年10月8日19時53分発行